研究課題の設定と研究方法論
―人文系の中国人留学生を中心として

李　　均　洋

【キーワード】研究課題、研究方法論、留学生、読書

１．はじめに

中国教育部が公表した2013年９月現在の統計によれば、中国で日本語専攻を設置している大学は延べ506校、大学での日本語学習者は既に679,336人に達している。

国際的な教育交流が発展するに伴い、留学生は大学院教育の対象として、新たな課題になっている。本稿は、日本で学ぶ中国人留学生のうち、人文系の大学院生に焦点をあて、研究課題の設定と研究方法論について管見を述べる。

２．読書から研究課題の設定へ

２．１．読書不足

中国から来日した人文系の大学院生の多くは、大学に入って日本語を習い始めており、中学から日本語を第一外国語として習い始めた者は多くない。中国では前者の学生を、「零起点」の日本語学科の学生と呼んでいる。日本語教育の現場から見れば、「零起点」の日本語学科の学生でも、非「零起点」の学生でも、そこに横たわる共通課題は主に読書量の不足と研究上のトレーニングである。

具体的に言うと、学部四年間の勉強は単語や文法を中心としたものである。しかし、卒論を作成するためには、しばしば指導教師が口にするように、本を読んだとしても、学術的に読み取ったかどうかが問題となる。だからこそ、日本語能力試験一級などに合格していたとしても、大学院生としての読書、特に研究課題を発見していくには入門の指導が必要なのである。

２．２．「文史哲不分家（文史哲は分家しない）」

中国及び東洋の伝統的な教育では、「文史哲不分家（文史哲は分家しない）」が唱えられている。要するに、文学や歴史学や哲学などは一体ものであり、分けられないものなのである。例えば、言語研究をするには、文学史や言語史や哲学史などの名著を読まなければ、研究はしがた

い。

大学院に入学した直後の第一学期の留学生院生の入門指導として必要なのは、読書篇目の選定である。もし成り行きで狭い研究分野に導いてしまったら、縦断的な専門知識がないので、研究課題を発見できないことはもとより、逆に「一斑をもって全豹を卜す」に陥ってしまい、非学術的な道へと迷いこみがちである。

一言で言うと、第一学期の留学生院生の指導の要点は、文史哲を貫通する名著の選定と読書報告書なのである。

２．３．研究テクスト（text）を本（もと）として

縦断的な即ち史的な読書の上に、横断的な研究テクストの選定は修論作成の第一歩である。

留学生院生の研究、特に修士論文の執筆は二年と時間が限られており、「通史」的なものからではなく、横断的なものから選ぶほうがいい。また、知識的に限られ、研究の初心者である者にとっては、研究テクスト（text）を本（もと）として読解から研究課題を探り、絞るほうがいい。

テクストとは、映画のシナリオのように、研究の源（みなもと）である。この源を離れたら、すべての研究は源なしの流れや根の無い木になってしまう。例えば、『源氏物語』を研究すれば、言語方向からでも、文学方向からでも、哲学方向からでも、『源氏物語』のテクストの読解に着手しなければ、どんな立派な方法論や最先端な理論があったとしても、無用になってしまうのである。

２．４．テクスト（text）の原典性と研究の多様性と多元化

言語資料の客観既存に基づくことで活発な言語生活になるように、テクスト（text）の原典性に基づくことで多様多元な研究が生成されるようになる。テクスト（text）の選定は研究者の好みや知識の蓄積による一方、国際的な高い次元や研究価値にもよるのである。前者は院生の自発能動性と言えるものに対して、後者は指導教官の客観的な裁断と言えるものである。

３．理論素養と研究方法論

３．１．理論素養とは

どんな研究方法論を採用するのか。これは個人の理論素養と深く関連している。

学部の四年間、日本語を専攻していた院生の立場から言うと、どんな理論素養を身に付けたのか、言い換えれば、どんな理論的な本を読んだのかが問題になる。

いわゆる理論素養、実際は問題を分析する理論能力なのである。この能力の養成はテクストの読解や研究のトレーニングの過程に基づいている。例えば『源氏物語』における女性の地位を課題に分析するならば、平安時代の女性学の素養が必要となる。つまり女性の地位について、抽象的な分析と総括的な理論素養が必要であるから、理論的な本を読まなければならない。

３．２．研究方法論とは

小島憲之氏の『上代日本文学と中国文学――出典論を中心とする比較文学の考察』（塙書房、1962年～1965年、日本学士院賞恩賜賞受賞）が、ある意味において出典論研究の古典と言えるであろう。小島氏は上代文学（著者のいう上代文学は、平安初期に至るまで、『白氏文集』の影響が現れる時点を境界とする）の表現に関し、中国文学の摂取享受の状態を、主として出典論（源泉論）の立場から眺めようとした。研究方法としては、「出典の指摘は、できる限り直接の出典を求める」ことを立言とし、伝来書の推定と類書の利用という形で、確実な成果を確保した。従来の研究では、最も古い出典を指摘する傾向が多かったが、小島氏はそれが「直接」の出典語出典文であるのか、「間接」のそれであるのかを鋭く追及し、「直接」の出典を突きとめることによって、上代人の表現過程の実体をつかまえようとした。これは前人未踏の着実な研究であり、本書の価値はこの点にある、と倉野憲司氏は評価している（万葉学会編『万葉』48号、1965年を参照）。

この研究方法論は比較文学研究の範疇に属するものであろうが、比較文学研究中の「出典論」の類に並べられている。「出典論」という研究方法論の特徴は、語彙や文脈や版本などの比較を中心として論考するものである。もちろん、中国古典を全面考査した上に、日本古典を比較しつつ、問題点を発見し、分析する。

修士論文で「出典論」を用いるなら、当面の学術トレーニングとして、ある古典中の「語彙」を断章的に調べるのではなく、ある古典全体の読解やこの古典の成立背景などを把握しなければならない。つまり、文献学の調査や読書などが必要である。

わかりやすく言うと、研究方法論は単純な方法論とは言えず、研究者の学術素養から昇華された「道具」と言えるものである。この「道具」を活かして、研究問題点を分析し、創見を出すことなのである。

もう一つの例を見てみよう。

厳紹璗氏の「神話――中国と日本の文化の融合について――」（『日中文化交流史叢書６・文学』、大修館書店1995年所収）では、記紀神話は中国の神話ないし神話を超越した中国の古典文化の中にある若干の因子が日本の神話に摂取され融合されたものであり、その面から言うと、一種の「変異体神話」であると論述されている。

「記紀」の中日―日中比較研究は、次の四点にまとめられる。

文章表現の比較研究。修辞法や文体、用字法、用語、文法などを中心に、記紀と漢訳仏典（史書にも触れた）との受容が論考されている。

神話の比較研究。例えば、記紀神話中の「日月眼生伝」は中国盤古伝説の受容、「江南系神話」は中国江南文化の影響などについて論考されている。

哲学思想の比較研究。例えば、記紀の儒教・道教からの受容、具体的にいえば、「仁」、「智」、

「勇」、「瑞祥」、「徳」及び「五行」、「孝」、「聖数」の思想観念について論考されている。

訓詁表現の比較研究。例えば、記紀中の語句や言葉の訓読みの中国古典から影響について究明されている。

この研究方法論を、「比較文化研究」中の「総合的な研究方法論」と名付けたい。

というのは、「文章表現の比較研究」もあるし、「神話文化の比較研究」もある。「哲学思想の比較研究」もあるし、「訓詁表現比較研究」もあるからである。

「総合」という言葉からわかるように、この研究方法論は総合的な学術素養が必要である。「比較研究方法」については、次のような忠告もある。

比較文学研究には、大きく分けて、狭義の比較文学研究（litterature comparee）と文芸比較研究（comparaison litteraire）の二種がある。前者は（ア）影響関係が認められる作品と作品または作家と作家などに関する比較研究、あるいは（イ）作品と作品または作家と作家とについて影響関係を立証しようとする比較研究を指す。一方、後者は（ウ）まったく影響関係のない作品と作品または作家と作家などに関する比較研究、もしくは（エ）発展段階に応じて同等の位置を占める作品と作品または作家と作家などについての比較研究を指す。（中略）注意しておきたいのは、少なくとも研究者として自立するまでは、（ア）（イ）すなわち狭義の比較文学研究を志してほしいということである。（ウ）（エ）すなわち文芸比較研究は、往々にして学術上の信憑性を欠くからだ。当面は狭義の比較文学研究に努力し、文芸比較研究には飛びつかないのが無難である。

（ウ）の例として挙げた『源氏物語』と『紅楼夢』の比較研究は、たしかに面白く、興味津々の話柄である。日本でも中国でも、この比較研究に手を染めている研究者は少なくない。けれども、影響関係が皆無の両作品を比較する学術的根拠は、きわめて乏しいのである。『源氏物語』の比較対象として、なぜ『紅楼夢』を選ぶのか？　どうして『金瓶梅』ではいけないのか？こうした疑問に対して、学術的に十分な説得力のある回答を用意しておかねばなるまい。ただ「どちらも男女関係の機微を描いた長篇小説で、よく似ているから」では、回答にならないのである。

（エ）も甚だ危うい研究方法で、古代・中世などの時代区分をどのように設定するかによって、比較対象がいくらでも変化してしまう。発展段階を設定する前提作業そのものに疑義が呈されれば、やはり比較対象の選択について学術性を帯びた確乎たる根拠が示せなくなってしまうのである。

比較文学研究なのだからといって、作品やら作家やらを何でも比較すればよいというわけではない。長い歴史を誇る中国文学には多種多様の要素があり、文芸比較の話題に事欠かないため、かえって厳しく警戒する必要がある。フランスは19世紀後半の象徴主義の詩と聞いて、ただちに中国文学に類似する作品を探し出し、たとえば〔唐〕李賀とランボー（Artur Rimbaud 1854－91年）の詩の比較研究を試みるのは、あくまで個人の趣味の領域にとどまる知的遊戯にすぎない。

両者の比較について、学術的な根拠は皆無に等しいのである。どうか安易に文芸比較研究に走ることなく、取り敢えずは堅実に狭義の比較文学研究を手がけてほしい。単なる比較のための比較に終わるのでは、とうてい比較研究とは言えないのである。①

４．研究課題

４．１．引喩法での万葉研究課題

『万葉集』の比較研究における「引喩法」研究は、古典文学研究の「出典論」の深化であると、王暁平氏は指摘している（王暁平「日本の日中比較文学研究」、『日本学刊』1997年第６期、第85～99頁）。中西進氏著『万葉と海彼』（角川書店1989年）はこの研究方法を実践している。「引喩法」とは、出典を暗喩として活用するものであるから、引用された「出典」の隠している意味や「暗喩」としての表現文字の様式を探り出さなければならない。

４．２．歴史学と民族学との結合研究方法での『詩経』と『万葉集』との比較研究課題

白川静氏著『万葉集』（『白川静著作集』第11巻、平凡社2000年）の『詩経』と『万葉集』との比較研究はこの研究方法を取り上げている。歴史年代から見ると、『万葉集』は『詩経』の1500年あとに歌われたものであるが、両者はそれぞれの歴史位置が類似しており、文学発展の基礎として共通するところがある。つまり、「民謡」を共通基礎とする『詩経』と『万葉集』において、古代歌謡はある特定の歴史時代の精神世界の中で生まれたものであると、白川静氏は指摘している（王暁平「日本の日中比較文学研究」を参照）。

４．３．『源氏物語』における中国史書や中国志怪小説・唐代伝奇的な叙述方法の影響という比較研究課題

田中隆昭氏著『源氏物語――歴史と虚構――』（勉誠社1993年）には、次の論考がある。「虚構の歴史」を語る性質を持つ『源氏物語』は、日本の『六国史』や中国史書への好みから書かれ、中国史書や中国志怪小説・唐伝奇的叙述方法を採用している。『史記』、『列女伝』、『古鏡記』、『補江総白猿伝』、『離魂記』などは、『源氏物語』中の人物設置や表現様式などに影響している（王暁平「日本の日中比較文学研究」を参照）。

４．４．江戸文学と中国文学との比較研究課題

諏訪春雄・日野龍夫編『江戸文学と中国』（毎日新聞社）に研究方向が示唆されている。この論文集には以下の章がある。(1) 長江流域と日本列島（神田秀夫）、(2) 仮名草子の背景（宗政五十緒）、(3) 読本と中国白話小説（徳田武）、(4) 江戸の漢詩人（揖斐高）、(5) 漢文戯作の展開（中野三敏）、(6) 芭蕉と唐宋詩（小西甚一）、(7)『西雨物語』の世界（高田衛）、(8) 艶史・伝奇の残照（前田愛）、(9) 文人趣味（水田紀久）、(10) 儒学と文学（日野龍夫）、(11) 海彼の風説（諏訪春雄）。

李樹果著『日本読本小説と明清小説―中日文学交流史からの透視』（天津人民出版社1998年）は、「出典論」から次の結論を出している。要するに、『剪燈新話』の影響を受けてから、江戸時代の「翻案小説」が生まれた。「三言」（馮夢竜の『喩世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』）の翻案から江戸前期読本が生まれた。『水滸伝』の翻案から江戸後期読本が生まれた（王向遠「近二十年来我国的中日古代文学比較研究述評」、『日語学習与研究』2003年第２期第57－62頁を参照）。

４．５．日本漢詩比較研究課題

「そもそもの初め、日本人は荒海を越えて中国へ渡り、その先進文明を懸命に吸収し、己の血肉と化した。」（石川忠久著『日本人の漢詩―風雅の過去へ』、大修館書店2003年、「序文」第２頁）「日本にとって、文明の規範・制度まで、あらゆることが中国を基準として営まれていて、状況の中で、支配者階級に連なる人々が、中国人と同じ教養を身につけ、中国人が書くように詩文を綴ることを要請されたものも、また必然の成り行きだった。」（興膳宏著『古代漢詩選』、研文出版社2005年第3－4頁）要するに、漢詩は日本人が中国詩歌をまねて作ったものであるが、日本の風土人情を表しているものでもあるので、比較研究の絶好の課題と言える。石川忠久氏や興膳宏氏などは、比較研究の方法で日本漢詩人の中国詩歌及び中国文化の影響を論考し、中日・日中比較文学研究の新課題を拓いた。

４．６．影響研究・文献学研究方法での近代中日文学関係史研究課題

「近代中日文学関係」の研究について、王暁平著『近代中日文学関係史稿』（湖南文芸出版社、1987年）をあげたい。「近代」とは、日本史の年代で言うと、江戸時代後期から明治時代まで、中国史の年代で言うと、鴉片戦争の前夜から清末民国初期までを指す。「比較文学の『影響研究』を基礎として、堅実で厳密な文献学の基礎学力を表わしている」（王向遠「近二十年来我国的中日古代文学比較研究述評」、『日語学習与研究』2003年第２期第60頁）。王暁平氏の『近代中日文学関係史稿』は、「中日文学の双方向交流の手がかりやルートや方式などにはっきりと描出している。著者が資料を思いどおりにコントロールしたり運用したりしたために、影響関係への描出と思慮の中には、ときどき画竜点睛的な理論分析があり、著者の識見を表わしている。だからこそ、この伝播と影響についての研究は、融通性のない資料堆積的なものではなく、文献資料と理論分析を有機結合して生気と活力に満ちるのであり、比較文学中の伝播と影響研究に成功の範例を提供したといえる。この著作の不足は、研究問題が多いので、ある問題について十分に展開深化していなかったことであろう。また、厳格な学術著作として、参考文献を列挙しなかったし、日本学者の多数の先行研究からどんな内容を学んで引用したか、あるいは著者本人の超越と独創した内容がどれであるのかということは脚注だけでは足りないので、参考文献を通して整理説明すべきである。」（王向遠「近二十年来我国的中日古代文学比較研究述評」、『日語学習与研究』2003年第２期第60頁）

４．７．中国題材の日本文学史研究課題

王向遠氏「中国題材の日本文学史研究と比較文学観念方法」（『中国比較文学』2007年第１期）は、この課題を「日本文学研究に属するし、さらに比較文学研究に属する」と認めている。「日本文学の中国題材」とは、「異国人物イメージや異国背景、異国舞台、異国テーマなどを含めるし、『想像』的なフィクション文学や純文学、または文学価値を持つ非純文学いわゆる写実性や記実性的游記文、報道文及び評論文・雑文などをも含める。」「文学題材史の研究は文学研究の一つのルートと方法でもあるし、純文学の研究でもある。というのは、題材が純形式の問題ではなく、豊富な社会文化の内容を載せるから、題材に対する研究が本質上からいうと、一つの文化研究、とくに文学社会学的研究なのである。実は中国題材の日本文学史研究は、中日双方の文化交流関係史の研究や中国文化の日本での伝播と受容の研究、比較文学と比較文化研究なのである。」（『中国比較文学』2007年第１期第130頁）明治維新以降の中国題材日本文学は中国歴史題材と中国現実題材に二分して良い。前者のジャンルには小説や新劇などがあり、後者は紀行文学と戦争文学と通俗文学の三種類に分けられ、ジャンルは多種多様である。「中国題材日本文学史研究」は、重要な文学的学術価値と意義を持つために、読者に日本文学と中国の関係を更に了解させうるし、一つの独特な側面から中日文化交流史の研究を深化させる。または中国読者に日本人の「中国イメージ」や各時代の日本作家の絶えることのない変化的「中国観」を了解させるといってよい。（王向遠「中国題材の日本文学史研究と比較文学観念方法」、『中国比較文学』2007年第１期を参照）

日本学者の「中国像」研究は、竹内実著『日本人にとっての中国像』（日本春秋社1996年）や村松定孝編『近代日本文学における中国像』（日本有斐閣1975年）などがあり、多くのヒントを与えている。

４．８．「日本式東方主義」研究課題

「日本式東方主義」とは、「日本近代文化歴史を反省することによる産物である。第二次世界大戦中には血生腥い侵略戦争に伴って、日本軍国主義もアジア諸国に文化侵略を行ったり、『大東亜共栄圏』や『大東亜文化の牛耳を執る者』などを唱えたりしたので、日本軍国主義文化の土壌の一部分になった。五井直弘著『近代日本と東洋史学』（青木書店1976年）、姜尚中著『オリエンタリズムの彼方へ―近代文化批判』（岩波書店、1996年／岩波現代文庫、2004年）などは、この問題を提出して、西方の代理人を自任する日本が「アジア諸国に東方学覇権を行使する」のは、日本式東方学の本質だと指摘している」（孟慶枢「東西文化場域間的探索―日本当代比較文学研究之一」、『深圳大学学報』2008年第２期第108頁）。この課題を研究するのは、日本文学と日本文化の行方や中日両国比較文学学界の相互理解などに有益だといえるであろう。（孟慶枢「東西文化場域間的探索―日本当代比較文学研究之一」、『深圳大学学報』2008年第２期、第107－14頁を参照）。

４．９．漢詩文化の日本語訳研究課題

漢詩はすでに奈良時代（710－794年）末期から訓読されてきたが、近代になって日本語で改めて翻訳された。翻訳再生された漢詩は元の漢詩に比べてどうであるか。

日本明治時代の歌人である正岡子規（1867－1902年）の「石壕の村に日暮(ひぐ)れて宿借(か)れば夜深(よふ)けて門(かど)を敲く聲誰そ」を見てみよう。

もとの漢詩は唐の乾元二年（759年）に作られた杜甫の「石壕吏」である。

暮投石壕村、有吏夜捉人。
老翁逾墻走、老婦出門看。
吏呼一何怒、婦啼一何苦。
聴婦前致词、三男鄴城戍。
一男附書至、二男新戦死。
存者且偷生、死者長已矣。
室中更無人、惟有乳下孫。
有孫母未去、出入無完裙。
老嫗力虽衰、請従吏夜帰。
急応河陽役、猶得備晨炊。
夜久語声絶、如聞泣幽咽。
天明登前途、独与老翁別。②

正岡子規の日本語訳は次のようである。

牆踰(かき)えてをぢは走りぬうば一人
司(つかさ)の前にかしこまり泣く
三郎は城へ召されぬいくさより
太郎文こす二郎死にきと
生ける者命を惜(おし)み
死にすれば又かえり来ず
孫一人あり
おうなわれ手力(たじから)無くと裾かゝけ
軍(いくさ)にゆかん米炊(かし)ぐべし
うつたふる宿のおうなの聲絶えて
咽(むせ)びなく音を聞くかとぞ思ふ
暁(あかつき)のゆくてを急ぎ
獨り居るおきなと別れ
宿立ちいでつ③

杜甫の原詩と正岡子規の日本語訳との対照からわかるように、原詩の「存者且偷生、死者長已矣（存する者は且(しばら)く生を偷むも、死する者は長(とこし)えに已んぬるかな）を、「生ける者命を惜(おし)み、死にすれば又かえり来ず」と日本語訳している。

原詩の「偷生」とは、命を惜しんでいたずらに生きながらえる意味であり、消極的な自嘲を含む。要するに、杜甫は安史の乱によって都長安を離れた唐玄宗皇帝のそばに奉仕できないことに対して心が咎めるのである。八世紀の封建社会に生活している杜甫は、忠臣として失格した不尽力行為を反省する立場から「偷生」と自己批判したのである。これは、儒家思想の宿命でもあり、封建儒士の必然心像でもある。

これに対して、訳詩の「生ける者命を惜(おし)み」は、積極的な近代的な生命観を唱えるのである。

問題は正岡子規がどうして杜甫の原詩中の「偷生」を昇華して「生ける者命を惜しみ」、すなわち近代的な市民的な生命尊重としたのか。

実は正岡子規の訳詩の背景は明治31年（1898年）である。1894年夏、甲午日清戦争が発生した。1895年４月、子規は従軍記者として中国遼東半島に行ったが、同年５月、急病で帰国した。甲午日清戦争は、日本近代以来、巨大な軍費や人力を投入した戦争であり、軍費２億3340万円（1893年度末の日本銀行を含む全国銀行預金額が１億152万円であった）、20－32歳の兵役年齢層について戦闘員の動員率5.7％と研究結論されている。

この訳詩の背景と杜甫の「石壕吏」原詩の「安史の乱」戦争背景とを重ねて原詩中の反戦意向を忠実に訳詩の中に表したのである。つまり、原詩の「三男鄴城戍　三男(さんだん)あり鄴城(ぎょうじょう)の戍(まも)りにつけり、一男附書至　一男は書を附して至る、二男新戦死　二男は新たに戦死せり」の描写を、「三郎は城へ召されぬいくさより、太郎文こす二郎死にきと」と直訳されている。杜甫の原詩は死魂霊を通して戦争の無惨さを悲劇的に訴える。正岡子規の訳詩もそのまま忠実に訳出していた。

八世紀杜甫の原詩「石壕吏」は十九世紀正岡子規の訳詩「石壕吏」を通して歴史を超え、国境を越え、同じく戦争の災禍を訴える。

にもかかわらず、到底正岡子規は杜甫のように封建皇帝の忠臣の立場での不尽力のために「偷生」を反省する必要はない。逆に近代のインテリの良知や近代一市民の人権から杜甫の原詩の「存者且偷生　存する者は且(しばら)く生を偷むも」の一忠臣の反省を超えて、近代的人間生命尊重のテーマを唱えようとしている。これは正岡子規の訳詩なりの近代的、全人類的積極的なテーマなのである。

孟浩然（689－740年）の「春暁」は千古伝唱される漢詩の名品である。

春眠不覚暁、処処聞啼鳥。

夜来風雨声、花落知多少。④

日本歌人である土岐善麿（1885－1980）は次のように日本語訳している。

春あけぼのの　うすねむり
まくらにかよう　鳥の声
風まじりなる　夜べの雨
花ちりけんか　庭もせに⑤

ざっと見ると、土岐善麿の日本語訳は原詩に忠実であり逐語訳なのであるが、鎌倉時代の吉田兼好の随筆名作『徒然草』第19段を読んでみると、日本文化における日本語版の「春暁」中の「花」は、日本人なりの自然観や美意識をユニークに表したのである。

「もののあはれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今一（ひと）きは心も浮き立つものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の声なども、ことの外（ほか）に春めきて、のどやかなる日影に、墻根の草萌（も）え出づるころより、やゝ春ふかく、霞みわたりて、花もやうやうけしき立（だ）つほどこそあれ、折（おり）しも、雨・風うちつづきて、心あわただしく散り過ぎぬ。⑥

なるほど、「もののあはれ」という日本伝統的自然観や美意識は、土岐善麿の日本語版「春暁」中の「花ちりけんか」を通じて、擬人化の修辞法によって「心あわただしく散り過ぎぬ」心理様態を表象している。いうまでもない、日本語読者のイメージによる読み取った土岐善麿の日本語訳「春暁」中の「花」は、孟浩然の原詩「春暁」の唐代の花のイメージではなく、『徒然草』第19段中の桜なのである。言い換えれば、土岐善麿の日本語訳「春暁」は、日本人の自然観や美意識に再生された。この擬人化の花の「心あわただしく散り過ぎぬ」哲学思想は、日本伝統的「無常観」に基づいているといってよい。

これがわかると、中国文化史上に李白や杜甫ほど有名ではない孟浩然「春暁」の絶えず日本語に訳される現象は、翻訳文化の文化移植再生の機能と原動力から出自したと、認識できるようになる。

ハルノネザメノウツツデ聞ケバ
トリノナクネデ目ガサメマシタ
ヨルノアラシニ雨マジリ
散ッタ木ノ花イカホドバカリ⑦

これは井伏鱒二（1898－1993年）の日本語訳版の孟浩然「春暁」である。カタカナの表記からわかるように、これは児童向けの日本語訳版といってよい。孟浩然「春暁」の日本語訳の魅力は、日本伝統の無常観の流れに従って、くりかえし近現代の各年齢層の日本読者の心を惹いているのである。

まとめていうと、漢詩文化の日本語訳研究課題は、漢文訓読と違って、ポイントは訓詁の研究ではなく、日本語訳による訳者の創造再生された日本文化の伝統や背景に注目すべきである。

5．終わりに

以上、非母語話者として日本で学ぶ中国人留学生の院生、主として人文系の学生に関わる研究、特に修論作成について述べた。要点は「研究課題の設定」と「研究方法論」であるが、これらは実は中国の大学における日本語学科の卒論指導にまで遡れるものである。具体的に言うと、留学生院生の卒論作成の「先天不足」が、修論作りの中に顕在化していたのである。研究課題の発見と研究方法論の採用は「わざ」ではなく、読書から出発しての学術トレーニングや学術素養が基本的な指導要領だと思う。

研究課題の設定と研究方法論がうまく進んでいくには、学術的な読書しかない。これを、来日している人文系の大学院生留学生への寄語として捧げたい。

注釈

1．古田島洋介「漢詩文の日中比較文学研究――方法上の注意と研究上の示唆」、『中日比較文学研究』、北京外語教学与研究出版社、2014年８月第１版第221－223頁
2．４．中国国学出版社電子版《国学経典文庫》2008年８月版
3．《子規全集》第６巻、講談社版1977年第200頁
5．『鴬の卵：新訳中国詩選』、筑摩書房1985年３月第５頁
6．小出光注釈『徒然草』、旺文社1996年第５頁
7．『井伏鱒二全詩集』、岩波書店2004年７月第48頁

参考文献

1．李均洋　佐藤利行主編『中日比較文学研究』、北京外語教学与研究出版社、2014年８月第１版
2．岩波文庫編集部編『読書のすすめ』岩波書店、1997年10月
3．澤田昭夫『論文のレトリック』、講談社、1983年６月
4．広島大学大学院文学研究科編『人文学へのいざない』（改訂版）、広島大学出版会、2013年３月
5．中西進等編『日中文化交流史叢書６・文学』、大修館書店、1995年
6．小島憲之著『上代中国文学と中国文学―出典論を中心とする比較文学的考察』、塙書房、1962－1965年
7．厳紹璗著『中日古代文学関係史稿』、湖南文芸出版社、1987年
8．中西進著『万葉集の比較文学的研究』、桜楓社、1968年

9．中西進著『万葉と海彼』、角川書店、1990年
10. 増尾伸一郎著『万葉歌人と中国思想』、吉川弘文館、1997年
11. 芳賀紀雄著『万葉集における中国文学の受容』、塙書房、2003年
12. 佐藤美知子著『万葉集と中国文学受容の世界』、塙書房、2002年
13. 白川静著『万葉集』、（白川静著作集　第11巻）、平凡社、2000年
14. 中西進著　王暁平譯《水边的婚恋―万叶集与中国文学》、四川人民出版社、1995年
15. 田中隆昭著『源氏物語―歴史と虚構』、勉誠社、1993年
16. 諏訪春雄・日野龍夫編『江戸文学と中国』、毎日新聞社、1972年
17. 李樹果著《日本読本小説与明清小説―中日文学交流史的透視》、天津人民出版社、1998年
18. 石川忠久著『日本人の漢詩―風雅の過去へ』、大修館書店、2003年
19. 興膳宏著『古代漢詩選』、研文出版社、2005年
20. 王暁平著《近代中日文学関係史稿》、湖南文芸出版社、1987年
21. 竹内実著『日本人にとっての中国像』、日本春秋社、1996年
22. 村松定孝編『近代日本文学における中国像』、日本有斐閣、1975年
23. 五井直弘著『近代日本と東洋史学』（青木書店1976年）
24. 姜尚中著『オリエンタリズムの彼方へ―近代文化批判』、岩波書店、1996年／岩波現代文庫、2004年
25. 李均洋著《閑收亂帙思疑義―日本文學研究》、外語教學與研究出版社、2013年
26. 和漢比較文学会［編］『和漢比較文学叢書』（汲古書院、東京）
　・第１期＝第１巻～第８巻（1986－88年）
　・第２期＝第９巻～第18巻（1992－94年）

いずれの巻も日中比較文学の視点に基づく各種の研究を収めた論文集。各巻の題目は下記のとおり。日本人の先行研究を参照する場合は、本叢書で目当ての論文を探すのが第一歩である。所収論文の詳細については http://www.wakan.jpn.org/publish.html を参照。

○第１巻『和漢比較文学研究の構想』所収論文等計15篇
○第２巻『上代文学と漢文学』所収論文等計14篇
○第３巻『中古文学と漢文学Ⅰ』所収論文等計14篇
○第４巻『中古文学と漢文学Ⅱ』所収論文等計16篇
○第５巻『中世文学と漢文学Ⅰ』所収論文等計11篇
○第６巻『中世文学と漢文学Ⅱ』所収論文等計15篇
○第７巻『近世文学と漢文学』所収論文等計10篇
○第８巻『和漢比較文学研究の諸問題』所収論文等計14篇
○第９巻『万葉集と漢文学』所収論文等計15篇

○第10巻『記紀と漢文学』所収論文等計16篇
○第11巻『古今集と漢文学』所収論文等計15篇
○第12巻『源氏物語と漢文学』所収論文等計15篇
○第13巻『新古今集と漢文学』所収論文等計15篇
○第14巻『説話文学と漢文学』所収論文等計16篇
○第15巻『軍記と漢文学』所収論文等計15篇
○第16巻『俳諧と漢文学』所収論文等計14篇
○第17巻『江戸小説と漢文学』所収論文等計15篇
○第18巻『和漢比較文学の周辺』所収論文等計12篇

研究课题和研究方法论
—以文科留学生为对象

李　　均　洋

人文学科中国留学生的学习和研究，特别是硕士论文的研究课题和方法论，是一个值得探讨的问题。来日本人文学科留学的中国留学生，大学四年主要精力用于语言学习和训练，毕业论文写作先天不足。主要问题是读书量不够，学术意识薄弱。解决这一问题的妙方，是指导留学生从读名著入手，在读书中发现研究问题点，升华形成切合自己知识结构的研究方法。